古典ナワトル語の
擬似冠詞と擬似後置詞

彼らはいかにしてパチンコ屋を開業したか

Twitter自由言語大学 (TwiFULL)
札幌言語学ミーティング 第12回
2012. 2. 14

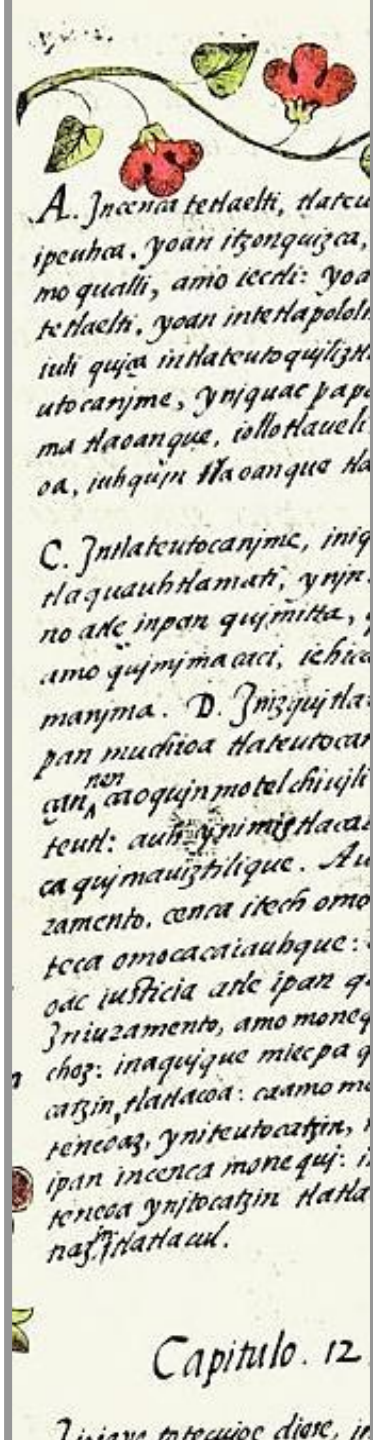
発表者: @Mitchara

発表をご覧くださる方へ

本発表の内容はアイディア段階であり、
モデル・証拠ともに不十分です。
ツッコミ・アドバイスをいただければ幸いです。

古典ナワトル語

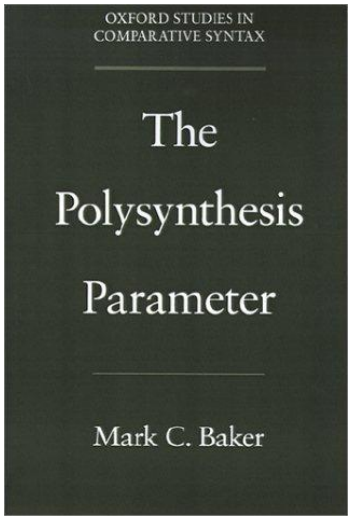
- 「エキゾチック」な文法特徴
  - Polysynthetic
  - Head-marking
  - “Omnipredicative” (Launey 1994)
  - Non-configurational?
- 研究は文字資料による
  - 絵文書・年代記 etc.
  - 宣教師文法家の辞書・文法書 etc.



発表概要

- 古典ナワトル語では
  - 冠詞っぽいもの *in* → 文法化が不完全
  - 後置詞っぽいもの *-c(o), -pan* etc.→ 位置名詞
- 古典ナワトル語では、語の独立性が高い反面、統語的依存関係が成立しにくい？
  - Baker (1996) の MVC 仮説との関係は？
- 形式的な制約に違反せずに機能的要請を満たすために、許された要素の寄せ集めで「それっぽい要素」を発達させている（かも）

Theoretical preliminaries



©1996 Mark C. Baker, via openlibrary.org

Polysynthesis とは何か

- Sapir以来の伝統的な定義:「すごく synthetic」
  - 1語が多くの形態素を含み、複雑な意味を伝える
- Baker (1996) の定義: 語の完結性
  - Morphological Visibility Condition (MVC)
    「 Head は同じ語内に標示された要素と同一指示の要素にしか θ-role を付与できない」
    ≒ 語が項構造上完結していなければならない
- その他、論者によって多様な定義
  - グルジア語やギリシア語を polysynthetic と呼ぶ人も

Baker (1996) の発想

- （典型的な）polysynthetic language には、単なる「語の長さ」以上の特殊な性質がある
- その特殊な性質とは語の完結性 (MVC) である
- この性質は parameter である ←ここは今回関係ない

Bakerの仮説には、polysyn. langs. とそうでない言語との連続性を無視してしまう、polysyn. langs. の多様性を過小評価してしまう、すごいイロコイっぽい etc. いろいろ問題があり、発表者も支持しているわけではないが、理論的にはやっぱりここが出発点

古典ナワトル語にみるMVC

1. Ni-qu-ittac.
   私.S-それ.O-見た
   「私はそれを見た」

2. Ni-qu-ittac in ācalli.
   私.S-それ.O-見た IN 船
   「私は船を見た」

3. *N-ittac in ācalli.
   私.S-見た IN 船
   「私は船を見た」

古典ナワトル語のゆるふわ統語

- 語内の制約が厳しいかわりに、統語的自由度は高い
  - 語順は自由（疑問詞は節頭にくる）
  - 不連続名詞句あり
  - 主語も目的語も省略できる
- “Omnipredicativity” (Launey 1994)
  （動詞 vs. 名詞の区別と述語 vs. 項の区別が一致しない）
  - 名詞も動詞も常に人称一致
  - 名詞句はそのままコピュラなしで述語にもなる
  - 動詞句は明示的な補文標識なしで述語の項にもなる

こんな説まである

- Andrews (2003) の説
  - 「古典ナワトル語では、名詞も動詞も1語で1つの節であり、多語文では節どうしが緩やかに繋がっているにすぎない」

4. Ø-Tlālticpac ti-nemih in ti-tlācah.
   それは-地上だ 私たちは-生きる IN 私たちは-人間だ
   「私たち人間は地上で生きている」

さすがにこの説を受け入れる人はあまりいませんが、Andrews の説を否定する強い経験的根拠がないのも事実

Baker (1996) による多語文の解釈

- Jelinek (1984) のワルピリ語の分析を継承:「Polysyn. lang. の諸特性は、項名詞句を全て adjunct と考えることで説明できる」
  - 語順の自由度の高さ
  - True quantifier の不在
  - True determiner の不在
  - Reflexive pronoun の不在 etc.

発表概要（再）

- 古典ナワトル語では
  - 冠詞っぽいもの *in* → 文法化が不完全
  - 後置詞っぽいもの *-c(o), -pan* etc.→ 位置名詞
- 古典ナワトル語では、語の独立性が高い反面、統語的依存関係が成立しにくい？
  - Baker (1996) の MVC 仮説との関係は？
- 形式的な制約に違反せずに機能的要請を満たすために、許された要素の寄せ集めで「それっぽい要素」を発達させている（かも）

擬似冠詞の *in*

「擬似冠詞」*in*

- 主に名詞の前に現れる不変化の particle
- テクストに死ぬほど出てくる
- 伝統文法では「冠詞」扱いされることが多い
- 名詞の定・不定にかかわらず現れ、あってもなくても文の意味はあまり変わらないとされる

5. Quinamaca cacahuatl.

6. Quinamaca *in* cacahuatl.
   彼はそれを売る IN カカオ豆
   「彼はカカオ豆を売っている」

In の冠詞っぽい特徴

- 語順が固定
- 単独で文をなさない
- おそらく文法化した指示詞起源（cf. *īn*「これ」）
- 文の述語には現れない（cf. アラビア語の定冠詞）
- Definite の名詞に現れやすい

In の冠詞っぽくない特徴

- 名詞以外の前にも現れる（補文標識 etc.）

7.	in	mahāltiah		cihuah
	IN	彼女たちは水浴びをしている		女たち

「水浴びをしている女たち」

8.	in	tlazohtilmahtli	in	mahuiztic
	IN	高級マント	IN	すばらしい

「すばらしい高級マント」

- 義務的でない（あってもなくてもよい）
- Definiteness と直接対応はしない

→ Himmelmann (2001) その他の類型論的基準に照らしても、どうも冠詞とはいいにくいような気がする

In の理論的解釈

- *In* を冠詞と考えにくい理論的理由
  - Baker (1996) では、polysyn. lang. は真の determiner をもたず、definiteness を義務的に表示できない（名詞が代名詞的要素を含むので）
  - Andrews (2003) の説では、名詞は主語部と述語部を含む節なので、述語部にあたる語幹だけを限定することはできないはず

In の性質まとめ

① たしかに見た感じ冠詞っぽいけど

② よく見ると形式上は冠詞とまではいえないし

③ 冠詞と考えると辻褄合わせがめんどくさい

- 文法化前の指示詞の文脈指示的な機能だけは一部残しており、「談話マーカー」くらいが妥当な位置づけという気もするが、やはり微妙
- ちなみに、こういう指示詞由来の冠詞っぽい謎の機能要素は同じ polysyn. lang. のモホーク語にもあるらしい (Mithun)

擬似後置詞

-c(o), -pan, **etc.**

「擬似後置詞」*-c(o)* etc.

- “Relational noun” と呼ばれ、メソアメリカ先住民語ではわりとおなじみの要素
- ようするに文法化した位置名詞みたいなもの
- 名詞語幹に後続するもの、所有者接辞をとるもの、その両方に使えるものがある
  - 名詞 *nacaz-tli*「鼻」→ *nacaz-co*「鼻に」
  - 名詞 *cal-li*「家」→ *cal-pan*「家に」
  - 三人称単数所有者接辞 *ī-* → *ī-pan*「彼に・それに」
- 地名 Mexico・Acapulco の -co（もとは locative）

-c(o) etc. の
後置詞（または斜格）っぽい特徴

- 単独では名詞として使えない（ものが多い）
- 名詞修飾語にも動詞修飾語にもなる

9. tlāl-t-icpa-c　tlācah
   地上-CO　人々
   「地上の人々」

10. tlāl-t-icpa-c　tinemih
    地上-CO　私たちは生きる
    「私たちは地上で生きる」

- 移動動詞の項になる
- 名詞を spatial な付加詞として使うには必須

-c(o) etc. の
後置詞（または斜格）っぽくない特徴

- 目的語人称接辞ではなく所有者人称接辞をとる
- 述定文の主語・述語にもなる（名詞と類似）
- 「…へ」「…から」のように方向や経路を表す要素は含まれず、単に「場所であること」を表示するのみ
- 対応する thing-nominal をもつことがある
- たまに thing-nominal と混用される

→ 位置名詞から後置詞への文法化が進みきっていない

-c(o), -pan etc. の性質まとめ

① たしかに機能的には後置詞っぽいけど

② 形式上はやっぱり位置名詞のまま

擬似冠詞・擬似後置詞のまとめ

① 機能的には冠詞／後置詞っぽい

② 形式上はもとの要素（談話マーカー／位置名詞）の特徴をほぼ完全に残している

ここでまさかの深読み

- 古典ナワトル語で *in* や擬似後置詞のような中途半端な要素が発達しているのはなぜか？
- 古典ナワトル語には、冠詞・前後置詞が存在しにくいような制約が働いている？

冠詞・前後置詞が発達できない
理由を考えてみた

冠詞が存在しない理由（仮説）(1)

古典ナワトル語の名詞は常に述定構造を含み、項でも名詞述語でも人称一致（赤が主語部、青が述語部）

- Andrews (2003) の分析: 人称接辞は代名詞

  11. [t-oquich-tli]「おまえは男だ」

  12. [Ø-oquich-tli]「彼は男だ」

- Baker (1996) を応用した分析: 人称接辞は一致要素

  13. [pro t-oquich-tli]「おまえは男だ」

  14. [pro Ø-oquich-tli]「彼は男だ」

- いずれにせよ、語内の要素またはそれに coindex された要素が R-argument（述定構造の主語）を表す代名詞的要素を含む: Andrews では人称接辞、Baker では *pro*

冠詞が存在しない理由（仮説）(2)

もし古典ナワトル語に定冠詞があったら、定冠詞は主語部と述語部の両方を限定してしまう

15. *THE +	[t-	-oquich-	-tli]
定冠詞	主語	述語	主語

16. *The [you are a man]

※ 説明を簡便にするため Andrews (2003) の分析を仮に採用

このため、冠詞は発達したくてもできないのでは？

前後置詞が存在しない理由（仮説）

- 古典ナワトル語では、文として独立できない lexical category はいらない子なのでは
  - 古典ナワトル語は head-marking であり、名詞に明示的な形態格がない（ほかの語に依存する形式がない）
  - 古典ナワトル語では、名詞・動詞は原則としてすべて文として独立できる（名詞は述定文、動詞は動詞文として）
  - 文として独立できない要素は、particle（*in, ye, oc, zan, ca, mā, nō* etc.）と一部の副詞（*cencah* etc.）のみ

形式的制約の抜け穴？

- **Determiner は NG**

  でも冠詞っぽいものが使いたい！

  →「Determiner ではなく談話マーカーです！」（キリッ）

  →「談話マーカーなら仕方ないな！」

- **斜格的要素は NG**

  でも前後置詞っぽいものが使いたい！

  →「形式的には後置詞ではなく位置名詞です！」（キリッ）

  →「位置名詞なら仕方ないな！」

つまりこういうことではなかろうか

- 賭博は禁止（形式的制約）

  でもギャンブルで遊びたい！（機能的要請）

  →「お金を賭けてるのではなく、渡すのは「景品」です！

  景品交換所は別店舗！」（キリッ）

  →「景品なら仕方ないな！」

  （制約に違反せず機能的要請を充足）

- このスライドはフィクションです。実在の業種、業界、企業とは一切関係ありません。

一般論: 形式と機能

- 自然言語の形式的側面と機能的側面
- 文法の「ブリコラージュ」
  - 機能的目的だけに沿って形式が発達するわけではない（自然言語は代用、抜け道、次善策だらけ）
  - でも、異なる制約下に発達した要素であっても、結果的に生まれるパターンは時によく似ている（魚とイルカ？）

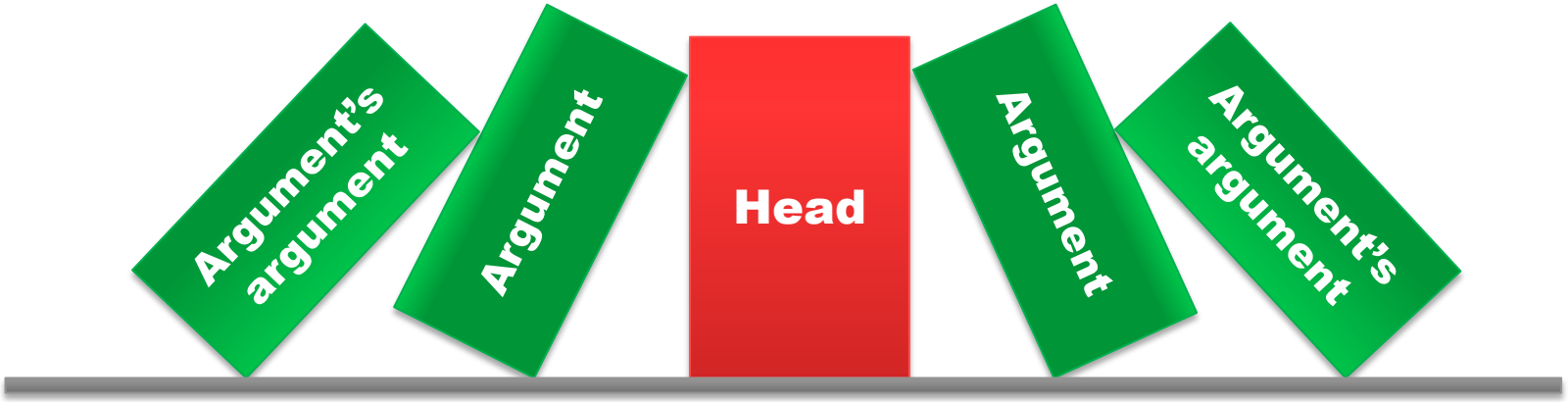
じゃあ、この場合の
「形式的制約」って何？

前後置詞を禁止する制約？

- 冠詞の不可能性は Baker の仮説でも予測できるけど、後置詞の不可能性はどこから？
- 一部の polysyn. langs. では特に斜格的要素が禁止されているようにも見えない
  - ナバホ語: *=dęę́, =dóó, =góó* etc.
  - アイヌ語: *=ta, =un, =wa* etc.
- でも、クリー語やイロコイ諸語など、ナワトル語と似た性質をもつ polysyn. langs. もある模様
- どうも Baker の MVC（だけ）ではダメな気がする

もうひとつのMVC？ (1)

- 統語関係って依存（よりかかり）関係だよね



もうひとつのMVC？ (2)

- 日本語・英語・スペイン語型の言語

よりかかってる→
（項を要求）

←よりかかってる
（headに依存）

- 古典ナワトル語型の言語

よりかからない→
（語内で充足）

←よりかからない
（Dependent専用の語はない）

BakerのMVC？

もうひとつの
head-marking 制約？

もうひとつのMVC？ (3)

- MVC（またはそれに類する制約）:
  「Head が充足していなければならない」
- 未知の head-marking 制約:
  「名詞や動詞は依存専用の形式を持たない」（？）

MVC的制約

~~Head が項構造を単独で充足しない~~

未知の制約

~~Dependent として他の語に依存する~~

- こういう制約は実在するだろうか？
  イロコイやアルゴンキンに照らしての妥当性は？

最大の問題点

- 現代ナワトル語（のいくつかの方言）
  - スペイン語の前置詞 *de, desde, para* などの借用により、前置詞が豊かに (Suárez 1977)
  - その影響もあってか、所有者人称接辞 + 擬似後置詞由来の *pan, huan* などの固有語語源の前置詞も発達
  - しかし、こうした現代ナワトル語諸方言の多くは依然として polysynthetic な要素を強く残しており、文法の全体像はそんなに変わっていない

→「未知の head-marking 制約」があるとしても、そんなに強い制約ではない

その他の課題

- 「制約がある」↔「傾向がある」の循環論
- 類型論的裏づけをとる必要あり
- 機能上の「冠詞っぽさ」「前置詞っぽさ」なんて、英語やスペイン語の色眼鏡が生んだ “translation mirage” じゃないの？
- 形式的制約？単なる類型論的傾向じゃないの？
- もし「未知の制約」が存在するとしたら、Baker の MVC（的な制約）との関係は？
- 「ほかの語に依存」をどう定義するか？

それでもこの方向性にこだわるのは

- 古典ナワトル語は:
  - 統語的制約が異様に緩い
  - ほかの音声言語について知られているような文法的な標示手段（語順、形態格、名詞クラス、etc.）に乏しい
  - これらをどうやって補っているのかまったく不明

（古典ナワトル語を習い始めた頃からの正直な感想でもありますが...）

- Baker (1996) を批判的に検討したいな
- そもそも head-marking ってなんだろう？

結局ここに行き着く

「Head-marking ってのはさ、やっぱり

どっか不便なんじゃないのかな」

（先住民語学者の某先生、飲み会の席でのお言葉）

ご静聴ありがとうございました。
ツッコミお願いします！

リファレンス

Andrews, J. Richard. 2003. *Introduction to Classical Nahuatl: Revised Edition*. Norman: Oklahoma University Press.

Baker, Mark C. 1996. *The Polysynthesis Parameter*. New York, Oxford: Oxford University Press.

Jelinek, Eloise. 1984. Empty categories, case, and configurationality. *Natural Language and Linguistic Theory* 2: 39–76.

Himmelmann, Nikolas P. 2001. Articles. In M. Haspelmath et al. eds., *Language Typology and Language Universals: An International Handbook*, Berlin: Mouton de Gruyter, vol. 1, 830–841.

Launey, Michel. 1994. *Une grammaire omniprédicative: essai sur la morphosyntaxe du nahuatl classique*. Paris: CNRS Édition.

Suárez, Jorge A. 1977. La influencia del español en la estructura gramática del náhuatl. *Anuario de letras* 15: 115–164.